

〔18〕 解放教育の実現を不可能とみる  
自分自身との闘い  
—昭和戦後期における  
同和・解放教育の—指導者・横田三郎  
(1923-2010) の生涯—

岡本 洋之(兵庫大学)  
教育史学会 第62回大会発表  
(於・一橋大学 国立西キャンパス)  
**2018/09/29**

# 1. 本研究の目的と方法

1965年に同和対策審議会が部落差別をなくすことを国家の政策として行うよう答申したが、この同和対策事業が2002年に終了した背景には、腐敗が問題化したことがあった。

発表者は、同和教育の理論にもまた問題点があったのではないかと考え、その指導的理論家の一人であった大阪の解放教育研究所長・横田三郎に焦点を当てて検討を進めてきた。

その問題点とは……



これから見ていくように、

(1)横田は、多数派形成ではなく少数のエリートによる社会変革を目指した。

(2)彼は、被差別部落住民が総じて地域のエリートであり、社会科学を容易に理解するというフィクションを吹聴した。

(3)彼は、部落住民のなかに不当な支配・被支配関係があることを隠蔽し、部落を美化した。しかもそのようにドロドロした現実を見ながらこれを克服しようとして解放運動に入っていく子どもがいたという事実すらも隠蔽した。

これらの3点は、社会主義革命を実現するために集団主義教育が必要であることを叫びつづけた、横田の教育理論の神髄が、辛辣な言い方ではあるが、偽りであったことを示している。このことと、彼が生前に政治的立場を超えて広く尊敬を集めたことをどう整合させればよいのか？

本研究では、一人の横田の中に「本音の横田」と「理論家の横田」がいて、両者が彼の死去まで闘いつづけたことを明らかにしたい。

※なお、横田が同和・解放教育界で影響力をもっていたことを示すため、彼が逐次刊行物に書いた文章の数を【表】に示す。

## 2. 横田に関する先行研究

横田に関する先行研究としては、大塚忠広(2016年)が彼の仕事の全体を概説しているほか、岡本洋之(2017年)は、横田が多分にフィクションを含んだ被差別部落および部落解放運動の姿を著作で描き、それによって同和教育の担い手になろうと志す大学生を酔わせたことを指摘した。

本発表は後者の研究をさらに深めようとするものである。

### 3. 横田の生涯の概略

横田は、中学校卒業まで香川県仲多度郡与北村(現・善通寺市)で育った。

1942(昭和17)年に広島高等師範学校文科二部(英語科)に入学するが、戦時のため在学期間は短縮され、軍需工場に勤労働員された。さらに45(昭和20)年には滋賀海軍航空隊に予備生徒として入隊し、神奈川県内で敗戦を迎えた。

高師卒業後は、島根県立大田中学校(現・大田高校)で教えたのち、1947年、京都大学文学部哲学科に入学、教育学・教授法を専攻する。

在学中の49年に、シベリアから帰還して大学院に入学した鈴木祥蔵(1919-2009)からマルクス主義を教えられ、これが横田のその後に決定的な影響を与えることになる。

京大大学院でも引き続き教育学を専攻した横田は、51(昭和26)年に大阪市立大学文学部助手となり、教授として退職するまで教育学を講じるかたわら、同和・解放教育論を含む多くの著作を世に出し、激しい調子で日本の教育と政治・社会のあり方を問いつづけた。この間、同和・解放教育界では1975(昭和50)年に「解放教育計画検討委員会第1次報告」が出されるが、横田はこのとき、解放教育の理念を扱う総論部会のチーフを務めている。

83(昭和58)年に広島修道大学教授(～1994〈平成6〉年)に転じてからも、横田は精力的に著作を発表する。また85年には解放教育研究所所長に就任している。

さらに以後晩年に至るまで、すでに1960年代には研究を開始していた帝政期ロシアの革命的民主主義者、ニコライ・ドブロリューボフ(1836-61)の著作の翻訳に力を入れ、2009(平成21)年には著作選集全18巻を完結した。

## 4. 横田の理論とその問題点

### (A) 横田理論の概略

横田は多数の著作を遺したが、そのほぼすべてに、日本の政治・社会・教育を問う激しい語気がある。

彼は生涯一貫して「平和と民主主義と科学の教育」を追求したが、その主張点は次のようなものであった。

(a)横田は、近代主義、とりわけ実存主義とプラグマティズムが、近い将来必然的である社会主義革命を妨害しているにもかかわらず、民主主義的な装いをしていることを批判した。

(b)横田は、資本主義社会の根本問題である資本家と労働者の階級対立に触れない教育を批判し、とくにそこから眼をそらさせている政権＝自民党と、日本共産党の民族主義を批判した。



## (B)多数派形成よりも，エリートの拾い上げを通じて社会変革をめざす

しかし自民党政権の力は強く，とても多数派形成が無理だと考えた横田は，別の方法を模索する。すなわち彼は，人の思想から自分たちに共鳴する部分を切り離してマルクス主義の社会科学にまで高めることを提唱した。

〔前略〕基本的な思想体系としてはプラグマティズムを持っている人が，個々の行動で民主主義者となるのは，その人のおかれた諸条件（基本的には階級的矛盾）によって，自己の基本的思想体系にさからった民主主義と科学の思想によるのであり，従って，彼の基本的な思想体系を批判することは，個々の行動がそれに基づいている民主主義と科学の思想を彼の基本的思想体系から切り離し，それを擁護することになる〔後略〕（横田，1969年，121頁。下線は岡本，以下同じ）

これは一般の労働者に対してできることではなく、あくまで一部のエリートが対象であったといわざるを得ない。

## (C) 「被差別部落住民＝エリート」というフィクションを組み立てる

しかもここから一気に横田は、被差別部落住民こそは社会科学をよく理解したエリートであると自著に記す。

保育労働者の賃金や労働条件改善のための自らの集团的な闘いが、子どもたちのための保育者集団の自己形成と固く結びつけられれば、地域の父母の利害とも直接結びつき、彼らの共感も容易に得られるでしょう。

(横田, 1976年, 144～145頁)

こうして彼は部落住民を、闘う労働者階級とともに、来たるべき社会主義革命の担い手と考えるようになる。

そして横田は、これらの運動の原理である集団主義を教育の唯一の原理として唱道した。彼の論は、彼の主張の枠内だけを見れば首尾一貫している。

しかしいったん教育実践に話が及ぶと、その途端に弱点が露呈してしまう。

横田は盟友・中村拓三(1923-2002)の書から一実践を紹介している(横田, 1976年, 151-153頁)。

ある小学校は年に一度の運動会の日だけ、昼食を学校給食ではなく弁当にしており、子どもたちはそれを楽しみにしていた。しかし3年生のキミ子という貧家の子は親が忙しいので弁当を持参できない。

彼女のクラスは当日を給食とする要求を決議し、クラス代表は全校の委員会でその主張を押し通す。一人の子どものことをみんなが考える態度に打たれた全校の委員会は、最終的に給食案を可決する。

中村の原書が強調しているのは、キミ子のクラスの子どもたちが教師の予想を超えて熟考し行動したことである。

このクラスは単に禁欲的に給食にせよと主張したのではなく、まずい脱脂粉乳を「ほんとうのミルク」に変えてくれなどの給食改善を唱えたのである。またこのクラスの代表は、4年生から6年生までの上級生を前にして話す準備として、周到に原稿を作ってスピーチした。(以上, 中村, 1975年, 218-220頁)

こういう子どもたちの自助精神も立派な闘いぶりも、横田は紹介時に削除あるいはトーンダウンした。

さらには、終始キミ子を支えつづけたマユミという子が、学校で積極的な行動を示すようになるのは、彼女の父が部落解放運動に参加するのを見てからだと言っている。

しかし中村書によると事実は、運動から手を引くと圧力をかけてくる「部落の支配者」と懸命に闘う父の姿を見てから、彼女は変わったのである。

つまり横田は、このような被差別部落住民間の支配・被支配関係も、子どもたちの自助的な立ち上がりも意図的に隠ぺいした。これは彼が、理論家として激しい言葉で集団主義教育を唱えながら、本音では自らの理論を学校での教育実践に適用する自信を失っていたと考えられる。

## 5. 自らが提唱する理論に対し，不信感を抱く自分自身と闘う

横田が自分の理論を教育実践に適用する自信を失い，被差別者が手をつなぐことなど無理だと考えたのは，幼少時の体験によるのであろう。彼が育った香川県の農村では，戦前には地主と小作農の経済格差が顕著であり，流血の事態すら起こっている。

小作農は小作料の引き下げを求めて地主に対して争議を起こした。そのような小作農を地主が排除しようとする時，農家1戸当たりの耕作面積が狭い香川県では，小作農は田畑の表面の土(甘土)をはぎ取り，「これは自分の労働の成果だから，自分の動産としてもって行く」と主張して地主に抵抗した。

しかし経済不況のなかで多くの小作農は貧困のため、この甘土を他の小作農に売却して耕作権を失い、耕作地のない雇農に没落してしまった(以上、善通寺市教育委員会市史編さん室編, 1994年, 186-188頁)。これは小作農の団結の難しさと、彼らが互いに対立する傾向にあったことを示す。

「小さな地主の子」であった横田はこのことをよく知っていたはずであるのに、同和・解放教育に関心をもつ学生向けに書かれた回顧録「我が青春に悔あり」(横田, 2016年b, 【資料1】)では、幼少時に見た部落差別・朝鮮人差別・女性差別に触れながら、小作農と雇農の問題を一字も書いていない。

これは、この問題が横田の記憶のなかで、いかに大きく重苦しい問題であったかを示すと同時に、彼が被抑圧者の立場に立ちきれなかったことを示していよう。

これに加え、横田が母校・尽誠学園の百周年誌に寄せた回顧録(横田, 1987年, 【資料2】)を見ると4つの点を指摘できる。

第1点は、在学中に彼が陸軍幼年学校の入試に失敗したことを、今も忘れられないショックだと生々しく記していることである。これは、60歳のころになっても横田が軍人への憧れを心の底に残していたことを示している。

第2点は、この回顧録において横田が、自分の中学生時代が軍国主義期であったにもかかわらず、校内の多くの教師がそれに染まっていなかったと明言していることである。歴史の教師が教科書に基づかずに授業を進め、英語の教師は丸亀の米国人キリスト教宣教師を運動会に招いていたことが書かれている。

これに対し、同和・解放教育に関心ある学生向けに書かれた回顧録では、横田の中学生時代はただ軍国主義一色だったとあるだけであり、多様な教師がいたことは省略されている。



第3点は横田が、校則を破って映画を見に行ったり、女学校の運動会をのぞきに行ったり、喫煙や飲酒をしたりする友人の輪の中に自分がいたことを楽しく回顧していることである。これも学生向けの回顧では語られず、中学生時代はただ重苦しかったとのみ述べられている。同和・解放教育に関心をもつ大学生には知らせる必要がない事実だとみて横田は書かなかったのであろうが、その結果彼は、大人(学校)が定めた枠を飛び出そうとする子どもの生き生きとした姿を隠してしまった。

第4点は彼が、「白馬に乗られた天皇」と昭和天皇に敬語を用いていることである。一方で横田はほぼ同時期に別の文章で、戦争責任を有する「天皇裕仁に対しては、怒りと憎悪以外の人間的な感情を私にははっきり拒否する」と書いている(横田, 2016年c, 42頁)。理論家としての横田と、本音の横田の乖離がうかがわれる。

以上の点からわかるように、横田は老齡に入った1980年代においてでさえ、本心では陸軍将校に憧れ、教師の多様性と、大人(学校)が定めた枠を飛び出そうとする子どもの姿に価値を認めず、天皇制にもけっして否定的ではなかった。

ここから、横田が唱えた「平和と民主主義と科学の教育」とは彼の理論の中で存在するのみであり、実現不可能であることを、彼自身がよく知っていたのだと考えられる。

## 6. 結論、および横田が私たちに突きつけていること

以上に見てきたように横田は、社会変革＝社会主義革命を、多数派形成ではなく少数エリートの方で実現しようとした。彼がこのエリート供給源として被差別部落住民を想定したために、部落住民が社会科学を容易に理解するというフィクションの作成や、部落住民のあいだにあった不当な支配・被支配関係の隠蔽をせざるを得なくなり、立ち上がる子どもの姿を直視することもできなくなった。

つまり横田のつまずきの根本は、彼が被抑圧者の団結に希望をもてず、少数エリートによる社会変革を急ぎすぎたことにあった。彼は集団主義に基づく「平和と民主主義と科学の教育」を唱えはしたが、それは子どもの自助精神も、大人(学校)が定めた枠を超えようとする子どもの活力も、教師の多様性もないものであり、実現の可能性はなかった。

07/2018 OKAMOTO H

それでも、心の底では軍人への憧れや天皇制を否定しきれないまま、横田は「平和と民主主義と科学の教育」を叫ばざるを得なかった。もはや彼には、自分自身への怒りを込めて、怒気を叩きつけるような文章を死去するまで書かざるを得なかったのであろう。すなわち横田三郎の中には「本音の横田」と「理論家の横田」の2人がいて、両者が激しく闘いつづけたのが彼の生涯であったといえよう。

横田の生涯をこのように解釈すると、福沢諭吉と共通点があることに気づく。日本の独立への危機感を根底に置きながら、日本全体の「智徳」の水準を上げる展望がなかなか得られず、少数者としての「ミッツルカラッス」に期待を示しつつも、その力を頼りにできない福沢は、結局自分が「文明化」の担い手として名乗りをあげざるを得なかった(福沢, 1942年, 45-46頁)。国の大目的のために多数の力を結集できるのか、できないとすれば担い手をどのように設定するかは、時代を超えて私たちに突きつけられている問題だといえよう。

## 引用・参考文献

- 大塚忠広(2016年)「解説 横田三郎の世界—過去と現在,そして未来へ—」, 横田三郎(2016年a)471-489頁。
- 岡本洋之(2017年)「研究ノート・『酔い』をもたらしたフィクション」, 『年報 教育の境界』第14号, 教育の境界研究会, 79-101頁。
- 尽誠学園百年史編纂委員会編纂(1987年)『盡誠学園百年史』, 尽誠学園。
- 善通寺市教育委員会市史編さん室編(1994年)『善通寺市史』第三卷, 善通寺市。
- 中村拓三(1975年)『解放教育著作集第3巻 解放教育と集団主義』, 明治図書出版。
- 福沢諭吉(1942年)『学問のすゝめ』, 岩波文庫。

- 横田三郎(1969)『現代民主主義教育論』, 盛田書店。なお初版は1967年刊。
- (1976年)『解放教育全書2 教育反動との闘いと解放教育』, 明治図書出版。
- (1987年)「軍国主義下の中学校生活」, 尽誠学園百年史編纂委員会編纂(1987年) 722-728頁。
- (2016年a)『現代人権教育の思想と源流—横田三郎コレクション—』, 鳥影社・ロゴス企画。
- (2016年b)「わが青春に悔あり」, 横田(2016年a)11-26頁。原文は『創流』第24号, 大阪市立大学教育問題研究会[学生サークル]。
- (2016年c)「天皇裕仁は人間なのか」, 横田(2016年a)40-42頁。

西暦	元号	『現代教育科学』／ 『別冊現代教育科学』	『教育科学 社会科教育』	『解放教 育』	『部落解放』	『社会評論』	『思想運動』	『知識と労 働』	『季報 唯物論研 究』	その他
	出版社	明治図書出版	明治図書出版	明治図書出版	大阪部落解放研究所→ 部落解放研究所→解放 出版社	活動家集団 思想運動	活動家集団 思想運動	知識と労働社	季報『唯物 論研究』刊 行会	
1958	昭和33									『教師の友』（日本学力向上研究会 出版部刊）1、『大阪学芸大学新聞』 1
1959	昭和34									
1960	昭和35									
1961	昭和36	1								『唯物論研究』（日本唯物論研究会 編、青木書店刊）1
1962	昭和37	1								『唯物論研究』1、『市政研究』（大 阪市政調査会刊）1
1963	昭和38	1								
1964	昭和39	3								『生活指導』（全国生活指導研究協 議会編、明治図書出版刊）1
1965	昭和40									
1966	昭和41	3								『月刊新世界ノート』（新世界社 刊）1
1967	昭和42									
1968	昭和43									
1969	昭和44									
1970	昭和45									『唯物論』（大阪学生唯物論研究会 編）1
1971	昭和46			2				1		『教育国語』（教育科学研究会国語 部会中央世話人会編、麥書房刊）1
1972	昭和47	1		1						
1973	昭和48									
1974	昭和49	2		1	1					
1975	昭和50			1	1					『解放の旗』（学生部落解放研究会 刊）1
1976	昭和51			2			1			
1977	昭和52	1		3	1		1			
1978	昭和53		1	3						『広報かわにし』（川西市役所刊） 1981年9月まで39回連載、 『リード』（※詳細は確認中）1
1979	昭和54	1	1	1						
1980	昭和55						1	2		『私学訴訟ニュース』（私立高校生 超過学費返還請求訴訟団刊）1、 『学生唯物論研究』（東京都学生唯 物論研究会連絡協議会刊）1
1981	昭和56	2		1						『所報 子どもと教育』（兵教組教 育研究所刊）1
1982	昭和57	1		2		1	1	1		『関西労働講座通信』1
1983	昭和58			1			1	1		『文学評論』（〔豊中〕文学評論研 究会）1
1984	昭和59			2	1	3				
1985	昭和60			1		1	1	1		『人権と教育』（障害者の教育権を 実現する会）1
1986	昭和61			3						
1987	昭和62									
1988	昭和63			4			1			
1989	平成1		1	2	1	1	3		1	
1990	平成2			2		3	1			
1991	平成3					1				
1992	平成4						1			
1993	平成5			1						
1994	平成6			1			1		1	
1995	平成7			10					1	
1996	平成8	1		3						
1997	平成9						1			
1998	平成10						2			『ヒューマンライツ』（部落解放研 究所刊）1
1999	平成11			1						
2000	平成12						1			
2001	平成13			2						
2002	平成14			2						
2003	平成15					1				『水と村の歴史』（信州農村開発史 研究所刊）1
2004	平成16									
2005	平成17					1				
2006	平成18						1			
2007	平成19								1	
2008	平成20									
2009	平成21						1			
2010	平成22					1				

[18] 解放教育の実現を不可能とみる自分自身との闘い  
—昭和戦後期における同和・解放教育の一指導者・横田三郎（1923-2010）の生涯—

岡本 洋之（兵庫大学）

教育史学会 第62回大会発表

（於・一橋大学 国立西キャンパス）

2018/09/29

【資料1】横田三郎（2016年b）「わが青春に悔あり」（原文は1986年）の  
小・中学校時代回想部分（原文のママ、傍点は岡本）

私は大阪に生れたが、物心がついた時にはもう父の本籍地である香川県の田舎に家は移っていた。現在の善通寺市であるが、当時は善通寺町に隣接する純農村であった。この善通寺は弘法大師の誕生地として有名であり、西国八十八ヶ所の中でも重要な札所として知られている。けれども、当時はそれ以上に軍都として重要だったのである。即ち、第十一師団の司令部があり、砲兵、騎兵、工兵、輜重（しちょう）などの連隊が小さな町の大半を占めていた。父は小さな地主であったが、この師団の兵器部にも一時勤めていた。男ばかりの四人兄弟の三男として育った私は、当時の田舎の普通の男の子として、野や山や池や川を遊び場にしていて。雨でも降らない限り、家の中で遊ぶことは殆んどなかった。勉強も中学に入るまでは殆んどせず、家では宿題をするのが精一杯であったが、そのことで親から叱られることもなかった。叱られたのは、暗くなるまで外で遊んでいて、夕食に間に合わなかった時くらいである。遊びは男の子と女の子とはっきり区別されており、男女が一緒に遊ぶのは幼児に限られていた。ビー玉やメンコや凧あげ、池での泳ぎなどを女の子はしなかった。とくに戦争ごっこ（兵隊ごっこ）は男の子の中心的な遊びであった。他の遊びの多くが季節的なものであったのと異なり、これは季節を問わずに行われていた。普通、腕力の強い子どもが日本軍、そうでない子がロシア軍や中国軍（当時はロスケとかチャンコロという蔑称を用いるのが普通であった）になっていた。それは、日本軍が必ず勝たねばならないからである。腕白だった私は大抵日本軍になっていた。

今の天皇〔昭和天皇〕の即位式（一九二八年。御大典といわれた）も済み、満州事変も始っていた当時の農村は、人権意識などまるで自覚されるような環境ではなかった。女性は、単に遊びだけでなく、生活と教育においても、労働においても露骨に差別され、男尊女卑は当然のこととされていた。民族差別や部落差別も同様であった。真鍮の鍋や薬罐の不用になったものと朝鮮飴を交換にやってくる朝鮮人を、子どもたちは言葉が変だといっっては嘲笑し、服装が汚いといっっては馬鹿にしていた。廃品を回収に廻ってくる部落民に対しても、ボロ買いとカヨツと呼んでいた。身障者を揶揄するのも当たり前になっていた。こうした差別的な言動に対して、学校では余り注意を払っていなかった。たまたま学校へ苦情が持込まれた時に訓辞がなされる程度であった。一般の大人や親たちも子どもと殆んど変る所はなく、露骨さが幾らか少ないだけで、差別の根はむしろ子どもより深かったといえよう。

逆に、天皇に対する崇拜の思想は徹底的に教え込まれた。小学校へ入学した時から天皇に対する絶対的な忠誠が教育の根幹となっていた。日の丸、君が代はもちろんのこと、校長が教育勅語を読み（奉読といった）、天皇・皇后の写真（御真影といった）に最敬礼をするのが学校の式典の普通のやり方であった。粗末な木造の校舎とは対照的な鉄筋コンクリート造りの神殿形式の小さな建物



が校庭の一隅にあった。これは奉安殿と呼ばれていて、その前を通る時には最敬礼をすることになっていた。天皇・皇后の写真や勅語類が中に格納されていたからである。修身、国史、読み方などの授業中や校長の訓話のさい、「恐れ多くも」とか「畏（かし）こくも」という言葉が出ると、当の校長や教師以下全ての児童が「気をつけ」の姿勢をとるようにしつけられていた。それは、天皇や皇室について語る前触れであるからである。これは、小学校だけでなく、上級学校においても、一般社会や軍隊のばあいも全く同様であった。

このような小学校で、私たちは国定教科書の国史によって天照大神の神勅、神武天皇の東征から始まる皇紀の歴史を教えられ、修身で「木口小平ハ死ンデモロカララッパヲハナシマセンデシタ」と習い、また、読本で「軍港の朝」を読まされていた。

連隊が近くにあったので、兵隊が行軍で村を通ったり、村の中で演習をするのは珍らしくなかった。男の子の殆んど全ては兵隊が好きであり、兵隊たちも子どもを愛していた。また、大人たちも軍隊には協力的であり、兵士には親切であった。

当時、男の子が愛読していた雑誌は月刊の『少年倶楽部』であった。そこには、日清・日露の戦争、満州事変、未来戦（日米戦、日ソ戦）などの戦争物語り、陸・海軍の生活や兵器、軍艦、飛行機などの話が、挿絵入りで、あるいは漫画で掲載されていた。その中で私を強く引付けたのは山中峯太郎の「星の生徒」という連載小説である。それは陸軍幼年学校の生徒の生活を描いたものであり、後に私が幼年学校を受験する直接の動機ともなった。

二・二六事件の前年に中学校に入学した。私たちの中学校は善通寺という軍都にあっただけでなく、校長が軍国主義者であった。当時の他の中学校のように高等学校や専門学校に進学するよりも、彼は陸海軍の学校に入ることを奨励していた。海軍兵学校を見学して感激した校長は、早速兵学校の真似をした。朝礼後、運動場から各教室へクラスごとに四列縦隊で歩調をとって行進するのである。それは私が卒業するまで続いた。靴は軍隊式の背囊であり、足には白いゲートルを巻いて登校した。教師と上級生に対する敬礼が厳しく定められており、全て軍隊式の挙手の礼であった。教師が生徒に体罰を加えることはそれほど多くはなかったが、上級生が何かと理由をつけては下級生をよく殴っていた。

中等学校以上の男子の学校には全て陸軍の現役将校が配属されており、その他に各学校で雇った予備役将校や下士官がいて、軍事教練が行われていた。そして、恐らく中等学校の軍事教練が最も厳しかったのではないかと思われる。一、二年生は徒手であったが、三年生からは本物の銃と劔を持って、兵士としての基本動作から始めて、下級指揮官の戦闘行動に到るまでの訓練を受ける。この軍事教練に合格して卒業すると、入隊後、幹部候補生を受験資格が与えられることになっていた。そして、必ず年に一度、師団から高級将校が学校へ軍事教練の査閲にやって来た。雨の日は、教室で軍事教練必携というテキストを使って、軍人勅諭から戦闘技術、軍事一般に到る講義が行われる。また、陸軍演習場での数日間泊りこみの軍事演習、全県下の中等学校を二分して行われる秋の対抗演習、天皇誕生日の陸軍の閲兵行進への参加があった。そして、運動会の最後のプログラムは五年生の軍事演習であった。

二年生の終りに私は陸軍幼年学校を受験した。幼年学校の入試には英語はない。中学に入学して初めて英語を習い、興味を覚えたが、その興味も抑えて、国語や数学などの入試科目に力を入れ、受験勉強に励んだ。ところが、その勉強が少しも役に立たなかった。初めに行われた身体検査で視力不足のため振落され、学力試験は受験できなかったのである。陸軍将校に憧れていた軍国少年に

とって、これは非常な打撃であった。私は、自分の前途が真暗になったような気がし、自殺までは考えなかったものの、暫くの間何も手につかなかった。近視でも陸軍經理学校なら大丈夫だと軍事教官がいてくれたが、算盤を持つ軍人などにはなりたくなかった。

中国での戦争は拡大し、出征兵士の見送り、戦死者の遺骨の出迎え、護国神社への参拝が行われ、また、出征兵士のいる農家へ稲刈りや麦刈りの勤労奉仕にも出かけた。一年生か二年生の時、音楽の授業で「満州国々歌」なるものを中国語で教えられもした。軍靴の音だけが響いて、反戦はもちろん、厭戦の囁きすら耳にすることはなかった。父が応召した時も、私は悲しむよりも誇りに思ったのである。

男女の関係も全く不自然なものであり、中学生と女学生の交際は固く禁じられていた。汽車や電車で通学する生徒は、男女が一緒にならないように、車輛や座席が中学生用と女学生用に分けられていた。そのような禁を破って処罰された生徒に対して、他の生徒たちも同情することはなかった。他校の生徒と喧嘩をして処罰された生徒には大いに同情が集り、英雄視されることすらあったのである。男女別学の例外として、近くの三年制の農業学校が共学であった。遠足などで、男生徒の後に女生徒が続いて歩いていくのを見て、私たち中学生は「夫婦（めおと）学校、夫婦学校」と囃立て、馬鹿にした。

音楽や美術の授業は一年と二年の時だけであり、ごく一部の生徒を除いてこの教科に興味を示す者はいなかった。それに、音楽は、教師が女学校の教師だったため一層生徒たちに軽視された。反対に、軍事教練の中で軍歌が教えられ、徒らに大声で歌うことを強いられた。国語や漢文では、古典や現代文学も学習しながら、進んで文学作品に取り組むという姿勢は当時の中学生には余りなく、むしろ、小説を読む者は文弱の徒として軽蔑されていたのである。私も小説を読むようになったのは高等師範に入学してからである。

当時、アカといえば非国民であり、売国奴であると考えられ、非常に恐れられていた。三年生の時、Sという若い英語の教師が赴任して来た。その教師の母親は私の祖母と識り合いであった。彼は英語の教師の中で一番若く、授業にも活気があり、しかも丁寧で、生徒に優しくかった。けれども、ある日突然姿が消えてしまった。辞任の挨拶もなかったのである。生徒たちには学校から何も知らされず、他の英語の教師から、事情があつて辞めたのだと聞かされただけである。祖母から、誰にもいってはならないという厳重な注意とともに知らされたのは、彼がアカで、警察に拘引されたということである。彼の母親がアカい本を沢山風呂で燃やしたという。共産主義については何にも知らなかった私は、「あんな優しい先生が恐ろしいアカだったのか。本当にそうなのか」と祖母に尋ねたが、祖母はそれには答えず、誰にも口外しないように念をおすだけであった。

(横田三郎, 2016年b, 13～18頁)

【資料2】横田三郎（1987年）「軍国主義下の中学校生活」全文（原文のまま、傍点は岡本）

軍国主義下の中学校生活

横田 三郎

（昭和15年卒業）

昭和十五年の三月卒業してから四十二年経った現在、同期生百二十九名中三十八名がすでに物故者の中に入っている。その中で戦死者が何名いるかは明らかにされていないが、相当数いるものと思われる。

私たちが中学校に入学した時には、すでに中国で局地的な戦争が行われており、三年生の時には戦争は日中事変として中国全土に拡大し、そして、卒業の翌年には遂に太平洋戦争に突入した。従って、当時卒業した者はほとんど全てが軍隊に、そして戦場に駆り出された。私たちは幸いにも生きて帰り、家庭をつくり、子どもを育て、今では孫を抱いている者も多い。しかし、今の私たちの息子の年齢にも届かない若さで戦場に倒れた友人たちのことを思えば、誠に痛恨の極みである。

沖縄で戦死した千代勝見君は私と家が近くであり、小・中学校十一年間、毎日通学を共にした仲である。彼は末っ子であり、家では最も可愛がられていた。小学校時代には腕白で、私も一緒に相当ないたづらをしていた。溜池で水泳しているのを同級生の女の子に見つけられ、先生に告げ口されて罰を受け、後でその女の子を殴って再び罰を受けたことがある。冬、池の土手の草を焼いて農家の人から学校に怒鳴りこまれ、私も一緒に教室の後ろに立たされたこともある。彼はまた喧嘩もよくしていたが、不思議に私とはほとんど喧嘩をしたことはない。

中学校に入ると、一緒に自転車で通学するようになったが、腕白の方も一緒に卒業していた。それぞれ新しい友達が出来て、以前のように行動を共にすることは少なくなったが、それでも、新築された彼の家へ私の方から遊びに行くことがよくあった。敗戦の前年、私はまだ学生で、広島軍需工場に動員されていたが、突然彼が私の下宿を訪ねてくれた。彼は、陸軍の見習士官として宇品に駐屯しているが、近いうちに沖縄に進出するという。当時の深刻な食糧不足を考慮して彼は米を持参しており、それで二人は八丁堀か流川の軍人専用の食堂に行き、夕食を共にした。彼は軍隊生活のこと、私は工場の模様を交々語り、いずれ二人ともこの戦争で死んでいくのだと話合った。しかし、激戦が予想される沖縄へ明日にも出かけるかも知れない身でありながら、彼が相変わらず陽気で、元気一杯だったのが印象に深い。そして、この日が彼と言葉を交わした最後となった。

彼の戦死を、私は復員してから知った。今も目を閉じると、広島で会った時の彼の元気な軍服姿に重って、白いゲートルをつけた中学校時代の彼の紅顔の顔が浮かんでくる。

小学校も中学校も同期で、戦死した友がもう一人いる。杉原重市君である。彼の戦死も私は戦後軍隊から帰って知った。彼は一人息子で、おとなしく、中学校時代には余り目立たない方であった。もし今彼が生きていれば、典型的なやさしい、いいおじいちゃんになり、目を細くして孫を抱いているに違いないと思われる。そして、もしあの悲惨な戦争さえなかったならば、という思いにどうしても駆られるのである。

時代は、天皇制のもとでの軍国主義の隆盛期であり、中国では戦争が続けられていたし、学校は、敵前上陸で有名な第十一師団の司令部が置かれていた軍都善通寺にあった。そこで、私たちの中学校五年間の生活にも軍国主義の色彩が色濃く反映していた。私自身、二年生の時、陸軍幼年学校を

受験した。当時、少年倶楽部に連載されていた山中峯太郎の「星の生徒」に感化されていたし、毎日よく見た乗馬姿の陸軍将校に憧れていたのである。片原町にあった偕行社で身体検査を受けたが、視力の不足で落とされ、一生懸命準備した学科は受けられなかった。陸軍将校への夢は破れてひどいショックを受けたのを忘れることができない。上級生になっても、陸士や海兵や予科練を受験できる友人たちを羨ましく思ったりした。

当時の私たちは、白いゲートルに背囊という兵隊なみの服装であり、先生と上級生には軍隊式の挙手の敬礼をしていた。欠礼をして上級生から殴られるということも度々あった。武道が正科であり、五年間柔道か剣道かのいずれかを学んだ。一年生から軍事教練が行われ、三年生以上は執銃教練で鍛えられた。軽機関銃や擲弾筒まで持たされ、実弾射撃や三豊郡にあった陸軍の演習場での宿泊教練や、他の中学校との合同演習も行われた。天長節（天皇誕生日）には毎年兵隊に続いて師団長の閲兵を受け、分列行進を行なった。これには女学生も参加していたのである。毎日行われる朝礼の後には江田島方式に則ったといわれる四列縦隊の行進によって教室へ向かった。兵営へ勤労奉仕に行き、出征する兵隊のために剣の整備をしたこともある。それは、武器庫に保管されていた剣の油を拭いとり、それを係りの兵隊に渡すと、彼がグラインダーで刃をつけるといった作業であった。配属将校に引率され、教練の服装で陸軍墓地に参拝したこともある。

そして五年生の時には、軍事教練を実施している全国の中等学校以上の学生・生徒の代表が宮城前の広場に集められ、天皇の軍事視閲を受けたのである。これは、当時御親閲といわれていた。我が校からは真鍋広海君、徳井清太郎君、寺内金彦君など十名の生徒が大久保校長先生、松永先生と軍事教官に引率されて参加したが、私もその中の一人であった。真鍋君が校旗を持ち、生徒は全て制服に執銃帯剣という装いで、岡山からは他校の生徒たちと一緒に特別列車で上京したのである。視閲が行われたのは五月二十二日で、よく晴れていたが風が強かった。軍服を着て白馬に乗られた天皇を目のあたりに見ることができて私たちは感激したのであるが、これは、今考えれば、それから四年後の昭和十八年十月、明治神宮外苑競技場で行われた出陣学徒壮行会の予行演習の性格を持っていたのではなかろうか。

軍国主義的な風潮はこのように次第に高まっていたが、まだ太平洋戦争は始まっていなかった。それに、大部分の先生方はこのような風潮に流されてはいなかった。当時、下級生に対する上級生の鉄拳制裁は相当頻繁に行われていたが、先生が生徒を殴ることは余りなかった。歴史の授業が皇国史観で塗り潰されたり、英語が敵性語として排斥されるといったこともなかった。私たちが四年生か五年生の時の運動会にアメリカの宣教師（女性）が見物に来たことがある。彼女は当時丸亀の教会にいたのであるが、英語の片桐先生が親しくしておられ、先生によって招待されたのである。運動会の最後に恒例として行われていた上級生の模擬戦（軍事演習）を彼女はどのような思いで見っていたであろうか。そして、片桐先生がそれをどのように説明されたのであろうか。それはもう今では知るよしもない。

また、歴史の大川先生の授業も印象に深い。今でいう教材の自主編成をされていたのである。先生の授業では、教科書は補助的なものであり、毎時間黑板一杯に教授内容を板書し、それに従って講義を進めておられた。当時の私たちは知らなかったけれども恐らく先生はそのような授業によって、当時次第に勢力を増していた神がかり的な皇国史観の教育に抵抗しておられたのではないかと思われる。

生徒たちも、四・五年後までの後輩諸君に比べれば、まだのんびりしたものであったといえよう。確か一年後に入学した生徒からは帽子も服もカーキ色（国防色といった）になったが、私たちは卒業まで、冬は黒、夏は霜降りという従来の制服のままであった。軍事教練やマラソンで鍛えられ、校内の規則も厳しく、校外でも教護連盟という校外指導員の監視の目が光ってはいたが、生徒たちの生活はまだ明るいものがあつた。少年らしいいたずらや茶目ぶりも先輩諸兄の場合と大同小異であろう。

先生たちに対するニックネームも、かなりの的をえたひどいものであつても、多くの場合、それは親しみをこめて使われていた。そして、生徒の間では先生の姓よりもニックネームの方を多く用いたので、今になっていくら思い出そうとしても、本名がどうしても思い出せない先生がいる。例えば、英語のK先生が「イースト」、同じく英語のX先生が「軍艦」または「ウォーシップ」、数学のM先生が「鬼」等々と覚えていても、「するめ」というニックネームを私たちが進呈していた物理・化学の先生の本名はもう忘れてしまっている。

弁当を昼食時間の前に食べることも相当行われていたが、友人の弁当、それも大体お菜が良いと見当をつけられていたものが知らぬ間に食われてしまうということも時々あつた。これは盗みなどという大それたことではなく、単なるいたずらと考えられていたので、よくその被害を受けた横田一弘君などもブツブツ文句をいうだけで、先生に訴えるというようなことはなかつたし、生徒たちも同情するどころか、面白がっていた。

試験の時のカンニングもなかなか凝つた事が行われていた。それは生徒の間では知れ渡っていたが、告げ口などする者はいなく時たま先生に摘発された者がいると、その生徒に対しては皆がむしろ同情したものである。私も二年生の時、女学校と兼担の音楽の先生の目を盗んでカンニングをやったことがある。楽譜を読むテストであつたが、ラッパ部の三木萬須君に予め教えてもらつて楽譜にカナをつけておき、先生の前で堂々と歌つたのである。おかげで、今でも私は楽譜が読めない。

先生たちや教護連盟の人々の目を盗んで、当時禁止されていた映画館へ入つたり、女学校の運動会を見に行つたり、タバコや酒を飲むことが生徒の間ではスリルに富んだ話題を提供していた。三年生ぐらいになると、頭髪を五分刈りではなく二枚刈りにしたり、木綿の制服の代りにガス地のものを誂え、おまけに上衣を短くし、ズボンの裾をラッパ型にして、八型のポケットをつけることが当時一部の生徒たちの間で流行していた。これらは先生方、特に軍事教官や体操の先生に摘発されていたが、上級生の鉄拳制裁を受ける原因にもなっていた。

現在とはちょうど逆に、中等学校以上では男女別学が当然のこととなつており、女学生との交際も禁じられていたが、当時の私たちはそれを不自然だとは感じていなかった。反対に、当時としては全く珍しく共学制をとっていた飯山農学校を風変わりな学校だと考えており、その生徒と道ですれ違った時には、「夫婦学校」などといつてはやしたてたものである。

還暦を迎えようという今、かつて教えを受けた恩師の先生方や友人たちのことを回想すると、さらに色々なことが次々に浮かんできて尽きるところがない。そして、知らぬ間に心と身体が若やいでくるのを覚えるが、この辺でペンを止め、母校の発展と同窓の諸兄姉の健勝を祈るものである。

（大阪市立大学文学部〔名誉〕教授）

（横田三郎，1987年，722～726頁）